

<h1>自己啓発推薦書</h1>		2024年 6月26日 発行者 矢木信男
書名	「教養を磨く～宇宙論、歴史観から、話術、人間力まで」 田坂広志著 光文社新書 (パートI)	発行日 2023/7/30
<p>1 推薦理由—本書は、新たな教養として、「生態系の知」「体験の知」「物語の知」という3つの知を深めてもらうために意図した書であるという。それぞれの知に対して、具体例をあげながら、今、なぜ、3つの知が必要とされているのかを語る。内容が濃く、今回はパートIとしたい。</p> <p>2 キーセンテンス</p> <p>(1) 「教養」とは？ <u>本来、教養とは多くの本を読み、様々な知識を学ぶことではなく、そうした読書と知識を通じて、「人間としての生き方」を学び、実践することである。</u>だが、現代の「教養論」では、しばしば、そうした「生き方」と言った大切な視点が見失われている。現代では、この「教養」の前提条件、「書物を通じて学んだ、様々な専門分野の、該博な知識」に大きな3つの変化が起きている。では、その3つの変化とは？ <u>第一には、「該博な知識」に関する時代の変化である。第二には、「書物を通じて」に関する時代の変化である。第三には、「様々な専門分野」に関する時代の変化である。</u></p> <p>(2) 第一の「該博な知識」に関する時代の変化とは？ 「該博な知識」を持っていることの価値が、大きく低下している。それは人工知能 (AI) 革命の結果により「該博な知識」だけなら、もはや、人間はAIには絶対になかない時代を迎えている。<u>AI革命が「該博な知識」を持つことの価値を大きく低下させてしまった。</u>その結果、「博識」や「博覧強記」の言葉が死語と化した。</p> <p>(3) 第二の「書物を通じて」に関する時代の変化とは？ メディアの発達と多様化により、情報や知識を手に入れる方法が、劇的に変わってきた。その結果、<u>「活字メディア」である書物よりも、「マルチメディア」である映像や動画を通じて情報や知識を手に入れる人々が増えている。</u>特に若い世代は YouTube など情報や知識を手に入れることが主流で書物を読む人が少なくなった。<u>映像や動画は、活字メディアに比べ、視聴覚に訴える迫力ある「疑似体験」や強く印象に残る「仮想体験」ができることである。</u>このこともまた、「教養」の意味を大きく変えていく。</p> <p>(4) 第三の「様々な専門分野」に関する時代の変化とは？ これまでは、「教養」を身につけるために難しい専門分野の本でも、努力して読みこなし、様々な思想や世界観、理論や概念を学ぶことが大切だとされてきた。だが、<u>現代では専門の難しい本を読まなくてもテレビの教養番組やドキュメンタリー映画、さらには YouTube の動画などを通じ、専門分野の学びが出来る。</u></p> <p>(5) これら3つの変化が、これからの「教養」のあり方に、次の「3つの深化」を求めようになると考えている。では、その「3つの深化」とは何か？ <u>第一の深化は、「専門の知」から「生態系の知」への深化である。第二の深化は、「言語の知」から「体験の知」への深化である。第三の深化は、「理論の知」から「物語の知」への深化である。</u></p> <p>(6) 「第一の深化の『専門の知』から『生態系の知』への深化である」とは、どういうことか？ <u>AI革命の結果、個別の専門知識だけなら、AIが世界中の最先端の知識をわかりやすく教えてくれ</u></p>		

る時代になった。その結果、人間の価値は様々な専門知識を持っていることではなくなる。「知識」が人間の価値でなくなるのであれば、何が価値となるのか。それが「**知の生態系**」である。
では「知の生態系」とは？ 昔から分野を問わず、優れたプロフェッショナルは個別の断片的な「専門知識」をもっているのではなく、そのプロフェッショナルなりの「個性的な思想体系」を持ち、それが「知の生態系」と呼ぶものに支えられている。「**一つのテーマ**」「**一つの問題**」「**一つの問い**」を中心とし、**様々な知識と叡智（えいち）が結びついた個性的な「知の生態系」をもつことだ。**人間にしかできない「**最も高度な知的営み**」は心に「**深い問い**」を抱き、その問いの周りに様々な知識と叡智が集まり、進化し続ける「**知の生態系**」を生み出すことだ。

- (7) **では、「深い問い」とは何か？** それは、容易に答えの得られない問い、時には「答えの無い問い」である。例えば、「人間とは何か」「組織とは何か」「社会とは何か」「生命とは何か」「死とは何か」「宇宙はなぜ存在するのか」「自然と人間の関係は何か」と言った問いである。
- (8) **「新たな教養」とは？** もし、「**深い問い**」を心に抱くならば、また、その問いを問い続けるならば、そこには、自然に、知識と叡智が結びついた「**知の生態系**」が生まれてくる。このようにこれからの時代は、「教養」というものには、「専門の知」から「生態系の知」への深化が起こる。これが「新たな教養」の第一の意味である。
- (9) **「第二の深化の『言語の知』から『体験の知』への深化である」とは、どういうことか？** 現代は新聞や雑誌などの「活字メディア」よりも、映画やテレビなどの「映像メディア」を通じて多くの人が知識を学ぶ時代になった。映画やテレビ、動画は「実際の体験」ではないが、「疑似体験」や「仮想体験」が得られる。これは活字メディアよりも圧倒的に視聴覚に訴えてくる。これらの「疑似体験」は感覚的・身体的な次元での深い学びになるだろう。映像はある種の疑似体験として、共感とともに深く伝えてくる。これからの時代は「教養」というものには「言語の知」から「体験の知」への深化が起こる。これが「新たな教養」の第二の意味である。
- (10) **「第三の深化の『理論の知』から『物語の知』への深化である」とは、どういうことか？** 例えば「人間とは何か」「組織とは何か」「社会とは何か」を学ぶとき、抽象化された「理論」として学ぶよりも、具体的な生きた「エピソード」や「物語」から学ぶことが主流になる。なぜなら、具体的な生きた「エピソード」や「物語」を読み、観ることは、単なる抽象的な思想や教養の学びとは異なり、自分自身の人生を振り返り、仕事を振り返り、マネジメントを振り返ることができ、自身の行動や生き方を照らし出し、自身の人生体験と重ね合わせて、深く学べるからである。「理論の知」から「物語の知」への深化が「**新たな教養**」の第三の意味である。
- (11) **では、新しい教養を磨く方法として、どんな方法があるか？** かつて、プロイセン・ドイツの政治家、オットー・フォン・ビスマルクは「愚者は、経験に学び、賢者は、歴史に学ぶ」と語ったが、この言葉は、「人類の過去の歴史に学べば、人類の未来を洞察することが可能だ」という思想であり、多くの哲学者や思想家、未来学者が依拠してきた基本思想である。だが、「人類の過去の歴史に学べば、人類の未来を洞察することが可能だ」という思想が、現実の変化に追いつけず、大きな限界に突き当たっている。高度な知的労働でさえも、大半を人工知能が代替する社会が到来するが、このような社会は、人類の過去に経験したことがない。

- (12) こうした「過去の経験」というものの限界を考えると、深い示唆を与えてくれたものがある。それは何か？ ノーベル文学賞を受賞した日系英国人作家、カズオ・イシグロの小説、「私を離さないで」である。 どんな内容か？ 臓器提供者として育てられたクローン人間の子どもたちの物語であり、若くして死ぬことが宿命づけられた人間の悲哀を描いた作品である。 もし、クローン人間の医療への利用が現実になったとき、そこで何が起こるかを、想像力の極みにおいて描いた、広義の SF（空想）文学である。同様に、アーサー・C・クラークの SF 文学の「2001年宇宙の旅」は、人工知能が高度に発達し、自我を獲得し、人間への反乱を起こしたときに何が起こるかを描いたものである。
- (13) 未来を知るためには「経験」に依拠した社会科学には限界がある。これから求められるものは何か？ それは「想像」に依拠した文学、特に SF 文学が大きな役割を果たすことになるだろう。「文学は力を失った」との議論があるが、決してそうではない。「経験」に学ぶだけでは未来が見えない時代であり「想像」の力を飛翔させる文学には 21 世紀、新たな役割がある。
- (14) 「知の生態系」はどのように生み出されるかを語る。まず「自身の思想」を紡ぎ出すには、どのような読書法があるか？ 「自身の思想」とは過去の様々な思想を学び、比較し、そこから自分の賛同する思想を語ることではない。「自身の思想」を持つとは、一つのテーマに対し、様々な知識や叡智が結びつき、自分らしい個性的な「知の生態系」を生み出すことである。
- (15) そのためには、どうすれば様々な知識や叡智が集まり、個性的に結びつくのか？ そのためには、「深い問い」を持つことである。 心の中に「深い問い」があれば、それが強い磁石となり、自然に様々な知識や叡智が集まってくる。そして一つの生態系を生み出していく。ただし、そのとき大切なことが 2 つある。
- (16) その大切なことの 2 つとは？ 一つは、「専門の垣根」を超えることである。 例えば、「死とは何か」という深い問いを心に抱いたとする。そのとき、その「死」というものを、様々な専門分野の視点から見つめることである。具体的には、それを「生物学的死」「医学的死」「人格的死」「社会的死」、さらには「人類の死（滅亡）」「宇宙の死（終息）」といった視点から見つめることである。もし、一つの深い問いを、そうした多様な視点から見つめ思索を深めるならば、そこには必ず、個性的な「自身の思想」が生まれてくる。 もう一つは、「ジャンルの垣根」を超えることである。 どういうことか？ 「死とは何か」について考えるとき、「専門書で語られた死」「文学で語られた死」「映画で語られた死」「漫画で語られた死」などを区別せず、重層的な視点で見つめ、思索することである。 例えば、多くの人々の看取りを行ったエリザベス・キューブラー・ロスの専門書、「死ぬ瞬間 (On Death And Dying)」や「続・死ぬ瞬間」を読むならば、「死とは『成長の最後の段階』なのか」との驚きとともに、本当に死の世界が存在するのかとの深い問いを抱くだろう。 また、伊藤桂一の小説「静かなノモンハン」を読むと、「死ぬ」ということの冷厳な現実を教えられる。戦地で腹を銃で撃たれて死ぬことが、どれほど凄惨な痛みであるかを描いている。また、映画「カッコーの巣の上で」を観ながら、脳の手術、ロボトミーを施されることが、「医学的死」は免れても「人格的死」を迎えることであり、その「死」こそが、人間にとっての「死」ではないかという問いを、我々に投げかけてく

る。さらに手塚治虫の金字塔的漫画、「火の鳥」を読めば、「永遠の命」を与えられた主人公が、最後に「殺してくれ！」と叫ぶ姿に、「死」とは、実は「安らぎ」ではないのかとの思いを抱く。

- (17) 現代の「教養主義」の問題が見えてくる。それは、ただ、様々な分野の書物を数多く読み、該博な知識を身につけることが教養ではないということだ。では、真の教養とは？ 何よりも、自身の中に、容易に答えの得られない「深い問い」を抱くことである。なぜなら、その「答えの無い問い」を問う力こそが、真の「知性」であるからだ。その「知性」の周りには、自然に、個性的な「知の生態系」が生まれてくるからである。されば、その「深い知性」に支えられたものこそ、「真の教養」に他ならない。補足すれば、「知能」と「知性」との違いは、「知能」とは、「答えの有る問い」に対して、いち早く、正解に辿り着く能力のことであり、「知性」とは、その全く逆の能力、「答えの無い問い」を、問い続ける能力のことである。答えなど得られぬとわかっていて、なお、それを問い続ける能力のことである。
- (18) 「人生百年時代」の言葉に惹かれ「これからの長い人生をいかに生きるか」に心を奪われたとき大切なことを忘れてしまう。そこには2つの尺度がある。その尺度とは？ 1つは人生の「長さ」であり、1つは人生の「密度」である。されば「いかに長く人生を生きるか」ということも大切であるが、「いかに密度の濃い人生を生きるか」も大切であろう。いや、むしろ人生というものを深く見つめるならば「いかに密度の濃い人生を生きるか」こそが大切であろう。
- (19) それは、なぜか？ 人生の「長さ」は決められない。しかし人生の「密度」は決められる。それが人生の真実だからである。「人生の密度」は、いま与えられたこの時間をどれほど密度の濃い時間として生きるかは、人間が決めることができる。我々自身の時間に処する覚悟により、「時間の密度」はどのようにでも変わる。日々の時間の使い方を振り返ってみればわかる。
- (20) では、その「時間の密度」を高めるには、どうすればよいか？ 働き甲斐を感じる仕事に取り組む。生き甲斐を感じる趣味に没頭する。 そうしたことによっても、時間の密度は高まるが、その根本に定めるべき覚悟がある。「人は、必ず死ぬ」「人生は、一度しかない」「人は、いつ死ぬかわからない」という3つの真実がある。その真実を直視し、目の前のかげがえのない時間を慈しむように生きるならば、我々の時間の密度、そして人生の密度は、確実に高まっていく。しかし、我々はいつもその真実を忘れてしまう。 人生百年時代の落とし穴がそこにある。
- (21) なぜ、60歳を超えて、心理学者のユングは、膨大な著作を残すことができたのか、画家のピカソは、あれほど数々の作品を残すことができたのか？ 実は、我々は精神の基礎体力を鍛え続けるならば、60歳を超えても、まだまだ素晴らしい可能性を開花させていくことができる。ただし、そのために求められるのは、一つの覚悟。その覚悟とは？ 年齢による「自己限定」をしない。 人生百年時代において、我々に問われているのは、その覚悟であろう。
- (22) ダ・ビンチ、モーツァルト、空海は、「天才」であるが、これらの「天才」の驚異的な才能は、実は人類の中に眠る可能性を示している。人類が持つ潜在的能力を顕在化させたとき、いかなる才能が開花するかを教えている。では、なぜ、その可能性が開花しないのか？ その潜在的能力が顕在化しないのか？ その理由は、我々の意識にある。「自分には不可能だ」という自己限定の強い思い込みにある。それが、我々の能力を抑え込んでしまっている。

- (23) **その具体的な例としては？** 地面に30cm幅の2本の線を引き、この道の上をまっすぐに歩くよう、誰かに言えば、健常者なら誰でも、その道を踏み外すことなく歩ける。しかし、もし、それが、断崖絶壁の上に架けてある30cm幅の丸太橋であったならば、我々は、「落ちたら死ぬ」という恐怖心と自己限定によって、本来の持っている能力は、無残なほど萎縮してしまい、その力を全く発揮できなくなるのである。
- (24) **逆に、近年、若い世代のアスリートが、野球、サッカー、ゴルフを始め、世界の舞台で活躍しているのは、なぜか？** 技術の向上だけが要因ではない。彼らが、「日本人は、海外では通用しない」という自己限定の意識を持たないことが大きな要因であろう。そして、こうした深層心理の自己限定が、我々の能力を萎縮させ、その開花を妨げるのは、肉体的な能力だけではない。精神的な能力も同様である。
- (25) **もし、そうだとするならば、何が求められるか？** 我々が、子供の頃から自分の可能性を十全に信じることを教えられ、自己限定の意識を抑圧されることなく生きる方法を教えられたならば、何が起こるか。そして、最先端の深層心理学によって、潜在意識のマネジメント技法を教えられて育ったならば、何が起こるか。
- (26) **今、心配されるのは「心の環境問題」である。「心の環境問題」とは何か？** 日々、テレビを通じて、毎日、暴力や破壊、悲惨や悲劇、事故や病気などの否定的なイメージ情報が、大量に、そして、一方的に、我々の潜在意識に刷り込まれている。が、このことが引き起こす「心身医学的問題」や「社会病理学の問題」は大きく、これらの問題こそ、心の環境問題である。ここには心理学の「サブリミナル効果」が関係し、潜在意識に否定的な心理を起こしている。
- (27) **「サブリミナル効果」とは？** 映画館で上映される映像に、観客の表面意識では気づかないような速さで、ほんの一瞬、しかし、繰り返し「コークを飲め」「ポップコーンを食べろ」という文字を挿入しておく、映画を観終わった後、多くの観客が、無意識に、コークを飲み、ポップコーンを食べたくなるといった心理効果のことである。
- (28) **このサブリミナル効果によって我々の心理と行動に悪しき影響を与えているが、それがわからないのが怖い。なぜか？** 通常環境汚染は目に見え、汚染物質を測定でき、どれだけ人体に影響を与えているかがわかり、適切な除染ができるが、心の環境問題はできない。汚染を除去する有効な方法もない。**もし、そのことを理解するなら、どうすべきか？** 週末、海や山などの豊かな自然に触れることや、静かな場所で瞑想することを習慣とする人々は、意識的にも、無意識的にも、この「心の環境問題」への懸念を抱き、自身の心の深層を浄化する「潜在意識のマネジメント」を行っているのであろう。
- (29) **しかし、我々の潜在意識への否定的な影響という問題は、視野を広げれば、テレビや映画などのメディアを通じてだけ、起こっているわけではない。日々の職場でも起きている。どういうことか？** 上司の愚痴や不満である。ふと目に入ってくる上司の暗い表情や投げやりな仕草である。それもまた、ある種のサブリミナル効果により、部下の潜在意識に否定的なイメージを刷り込んでしまっている。しかしこの上司は自分の愚痴や不満、表情や仕草が、部下の意識への悪影響を通じ、彼らの意欲を損ね、その能力の開花を妨げていることに気づいていない。

- (30) **だが、一方で「心の環境問題」には大きな救いもある。「心の環境問題」ではマイナスの影響だけでなく、プラスの影響も起こるからだ。具体的にはどのようなことか？** 職場の上司の明るい笑顔や生き生きした表情だ。自然に口から出る部下に対する感謝の言葉やねぎらいの言葉、そうしたものが、部下の表面意識はもとより、その潜在意識も良きものに変えていく。
- (31) **これは、決して小さなことではない。なぜか？** これからの高度知識社会におけるマネジメントは、部下の中に眠っている知的可能性や創造性を引き出し、その隠れた能力を開花させるための「潜在意識のマネジメント」に向かっていくからである。では、部下に対して優れた潜在意識のマネジメントを行うために求められることは？ まず、何よりも経営者やリーダーに問われることがある。それは、自分自身の潜在意識のマネジメントが、できているか、ということである。そのことが、深く問われる。
- (32) **ある男性が海外出張で、自動車事故に遭い、現地の病院に運び込まれ、九死に一生を得た。だが左足を切断する結果となった。意識が回復した男性は、左足を失ったことを知り、ひとり、嘆き悲しんでいた。そこへ日本から駆けつけた妻が何と言ったか？** 「あなた、よかったわね！命は助かった！右足は残ったじゃない！」。この話は我々に大切なことを教えてくれている。**我々の人生の、本当の「分かれ道」はどこにあるのか？** それはどのような出来事が起こったかにあるのではない。 起こってしまった出来事をどう解釈するか、その解釈にこそ、ある。
- (33) **人生の真実をありのままに見つめるならば、「成功」の陰には、必ず「失敗」があり、「勝利」の陰には、必ず「敗北」がある。されば、我々の人生において、失敗や敗北、挫折や喪失、そして、病気や事故は、決して避けることは出来ない。では、人間の「真の強さ」とは何か？** それは、決して「必ず成功する力」や「必ず勝利する力」のことではない。 人間の「真の強さ」とは、上記(32)の妻の姿にある。 すなわち、人生において、いかなる出来事があろうとも、その「解釈」を過たない力である。 いかに否定的に見える出来事が起ころうとも、それを肯定的に「解釈」する魂の力である。 その「解釈力」と呼ぶべき力である。
- (34) **では、いかにすれば、その「解釈力」を身につけることができるか？** 一つの覚悟を定めることである。 「人生で起こること、すべて深い意味がある」。 その覚悟を定め、その意味を考えるという営みを続けるとき、我々は自然に、人生で与えられた否定的な出来事の中にも、肯定的な意味を見出す力を身につけていく。 「解釈力」と呼ぶべき真の強さを身につけていく。
- (35) **では、どうすれば、その「解釈力」をゆるぎなきものにできるのか？** そのためには、一つの「信」を定めることである。 「自分の人生は、大いなる何かに、導かれている。この否定的に見える出来事も、大いなる何か、自分を育てようとして与えたものにほかならない」。 その「信」を定め、「この出来事は、自分に、何を学べと教えているのか」「この出来事は、自分にいかなる成長を求めているのか」を考えることである。 そして、「信」を定め、人生におけるいかなる逆境も「大いなる何か」が自分を成長させるために与えたものと感じられるようになったとき、心には、いつか、次の思いが浮かんでくる。 「人生で起こること、すべて良きこと」と。

(今回はパートⅠで、次回はパートⅡ)